
Fate ~再開~

aria

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate／再開

【Zマーク】

20230

【作者名】

airia

【あらすじ】

もしもセイバーとアーチャー（衛富士郎）が再び冬木市で聖杯戦争をする場合、この二人がお互いを好きでいる場合だつたらなど、なるべく原作のキャラを使い、この二人の願いがかなえていく様子を書いていこうと思います。なるべくこの二人を中心として物語を進めようと思います

新たな始まり（前書き）

はじめての投稿です。へたくそですがよろしくお願ひします。
つじつまがあわないときなどあるかもしませんが、そこは見守
ってください。

FateのTYPE小説です。

新たな始まり

夢を見ていた・・・。

愛しい青年と共に戦う夢・・・。

「シロウあなたともう一度、会いたい・・・っ！」

ふいに涙が零れ落ちた。とてもなく息苦しく感じた。

(あの人顔が見たい!)

セイバーは涙を流しながら目を瞑つた、カレと会つために、とても永い眠りに・・・

ここで何でも願いをかなえる聖杯をめぐる戦いが開かれよつとしていた。

衛宮士郎はランサーに再び命を狙われていた。家の土蔵に逃げ込んだとき魔方陣のようなものが輝きを放つた。

そしてそこに美しい容姿を持つた王・・・セイバーがあらわれた。

「「「」」」

冬木市

士郎はともかく、セイバーもとても驚いていた。

見覚えのあるとても懐かしい場所、そして愛した青年が目の前にいる。・・・だが

(この人は私が愛した人ではない。)

「あの～。」

士郎が沈黙を破った。

「は、はい。なんでしょ、うか？」

「なぜ泣いているんですか？」

・・・！自分でも知らぬ間に泣いていた、だがいつまでもこうしていられなかつた。

「いえ何でもありません。私はあなたのサーヴァント、セイバーです。」

「あ・・ああ！俺は衛富士郎だ。すきによんしてくれでいいよ。」

「そうですかそれではシロ・・・ヒミヤと呼ばせていただきます。私もそちらのほうが呼びやすいので。」

「ああそつか。」

(この人をシロウと呼んではある人を裏切ることになる・・・)

こみ上げてくる思いを抑え、セイバーはランサーと戦闘する態勢に入った。

凛とアーチャーは急いで衛宮士郎のところへむかっていた。

(さてゲイボルグがどう戦うか・・・っ!)

ランサーとの戦闘を考えていたアーチャーはもう一人のサーヴァントがすでに戦っていることに気がついた。

そしてそこにたどり着くとかつて共に戦っていた女性が戦っていた。

ランサーは槍ゲイボルグを構えセイバーに放った。

(くっ！ まづいよけきれない！！！)

槍の一撃を覚悟したとき赤い影が私の前に現れ、その一撃を受け止めていた。

「無事か？・・・セイバー。」「！」

それはとても会いたかつた人、共に戦い、愛していた人がいた。

「ア、アーチャー何を！」

凛はアーチャーがいきなり出て行つてしまいとでも驚いていた。

「サーヴァントがサーヴァントを庇うだと……ちい！」

ランサーは自分が分が悪くなつたことを理解しすばやく去つていつた。

「いつたか……。久しぶりだなセイバツ……！」

ガバッ！

「ほんとうに会いたかつた。シロウにとても会いたかつた！…あなたは本当にあのシロウなんですね？」

愛しの人が今ここにいる！…また会つことができた！…セイバーは涙をこらえ切れなかつた。

「ちょっとまつっ…て？…ええ！」

「ちょっと二人なにしてるの！？」

遠坂とエミヤは今の状況にとても混乱していた。

「セイバー今はこの場を納めることが必要だと思つただが……」

「はっ…・・・も、申し訳ない！」

耳まで真っ赤に顔を赤くし、セイバーは俯いた。そして凛が口を開いた。

「……で、あなたたちはどんな関係なの？」

凛がいまだ納得がいかないよう聞いてきた。

「なあに昔の戦友だ。」

アーチャー（シロウ）はそういった。

「でもあなたたち時代は同じなの？」

「こいつめ・・あいかわらず鋭い。

どうしていいのか、れつかからセイバーはおどおどしている。

「まあそれよりだ、そこの少年の」とせいのか凛？」

れつかから口を開けたまま呆けてくるHIIAYAを指していく。

「えつーあ、ああそうね。とりあえず教会にでもこきましようか。」

そして四人はそろって教会へと向かった。セイバーとアーチャーは寄り添つように並んで・・
教会につくとセイバーが言った。

「わたしゃここで待っています。凛アーチャーもいいですか？」

「えつ…うへん、まあいいわ、そこでイチャイチャでもしていればいいわ」

何かを察したように笑い凜はいった。

「「なつー」「

凜の言葉に一人とも赤くなってしまった。

「じゅあこつてぐるわ」

やつこつてHIMAYAをつれでいつてしまつた。

「相変わらずアイツは油断ならないな。」

苦笑いしつつシロウがいつた。隣にはまだ顔の赤いセイバーがいた。

「セイバーもう一人とも言つたぞ。」

「……………はつすいません」

やつとセイバーが我に返つた。

「なぜあなたがここに…？」

「わくこつおまえはぢりしてだ?」

「わ、わたしはその、えと、…あなたに会いたかつたから…」

「

尋常ではないくらい顔を赤くしましたセイバーは俯いてしまった。

「なつ……なら俺と回じか……」

えつ？今なんて？セイバーがシロウの顔を見た。シロウの顔もまた赤くなっていた。

そんなこの人がたまらなく愛しい。そうセイバーは感じ、シロウの胸に顔をうずめた。シロウはそれを拒まずセイバーを抱きしめた。ずっと一緒にいたい。時間がとまってしまえばいい。それがいまセイバーとアーチャーが思うことだつた。

「そりそろいいかしら？それともおじやま？」

いつのまにか凛とエミヤが戻っていた。セイバーとアーチャーは顔を真っ赤にし、セイバーは名残惜しそうにシロウから離れた。

「覚悟を決めたのですね、エミヤ。」

「ああ頼りないマスターだけどうりじへ頼むよ。」

「はい、私はあなたの剣となり盾となりましょ。」

「じつじてセイバーとエミヤが契約したといひで再びアーチャーが口を開いた。

「どひひでセイバーおまえは魔力を供給出来ているのか？」

「はじ多くはありませんが魔力は頂けています。」

「むひ、なら良かつた。」

二人が何の話をしているのかわからない凛とHIMIYAは混乱していたが、やがて凛が気になっていたことを聞いた。

「ねえ、二人は何を知ってるの？」

「……伝えても大丈夫だよな。」

「はい問題はないかと思します。シロウ。」

「えつー？」

「まあそういうことだ、俺は衛宮士郎、お前の行く末だ。……とはいっても可能性だがな。」

「じゃあ何？あなたはここにいる士郎と同じなのー？」

「まあ不本意ではあるがそうだ。」

「不本意って何だ」「まあ嘘ではなさそうね。」……よ

凛によつてHIMIYAの言葉はわざわざられてしまつた。

「やうやうこい・お兄ちゃん。」

急にとても強い気配を感じた。化け物といったほうがいいであつたサーファントと小さな少女がいた。

「せつかくマスターになれたけど一人にはここで死んでもらつね。」

バーサーカー。」

戦闘に入る寸前、アーチャーがさえぎつた。

「なあひとつ条件でもいいか？俺とそこのセーバーでそいつを一度殺せたら引いてもらつてもいいか？バーサーカーにお嬢ちゃん。」

「あら知つてるの。まあいいんじやない。」

バーサーカーも言葉にしてないが良いみたいだ。

「いくぞセーバー！」

「はいシロウ！」

新たな始まり（後書き）

読んでくださった方ありがとうございました。
短いし変だしこの次がいつになるかわかりませんがよろしくお願い
します。

大きな壁（前書き）

感想くださった方ありがとうございました。前回は本当に誤字が多かつたので今回はきをつけたつもりです・・・もしも間違えがあったら教えてください。

相変わらず短いと思いますがよろしくおねがいします。

大きな壁

セイバーとシロウはこのバーサーカーのことを知つていてこうなることも覚悟していたので落ち着いて戦闘に望むことが出来た。二人とも過去に戦つたことがありバーサーカーの手も読めた。だがさすがはギリシャの英雄ヘラクレス一筋縄にはいかなかつた。

シロウは「干将・莫耶」をセイバーは「インビジブル・エア風王結界」を駆使してバーサーカーの持つ巨大な岩の剣に対抗していた。バーサーカーにはランクA以下の攻撃は通用しない。シロウが惑わしセイバーが攻撃を与えるというやり方で二人は戦つていた。

(こいつはダメージを受けているのか！？)

攻撃を加えているセイバーは焦つっていた、早く仕留めないと引き付け役のシロウに多くの負担がかかつてしまふ、その負担を少しでも軽くしたかった。

「セイバー！」

シロウの叫ぶ声が聞こえた、さつきまでシロウに気をとられていたバーサーカーが本命はセイバーだとわかり、いっきに距離をつめてきた。

(つー)

氣を抜いてしまつてはいたが何とか岩の剣を風王結界で受け止めた。
・・が凄まじい一撃でセイバーの風王結界ははじかれてしまつた。
獲物をなくし防ぐ術がなくなつたセイバーにバーサーカーはさらに

岩の剣を横薙ぎに振つてきた。

「くつー！」

セイバーは十数メートル離れたところまで吹き飛ばされたが衝撃が走つただけで、体に痛みはなく、目の前には赤い影があることに気づいた。

(――――――)

それはシロウだつたもろに腕にくらつたのか物凄い量の血が流れていた。

「大丈夫か？ セイバー。」

なおも自分を心配してくれる彼に胸が痛んだ。負担になるどころか自分を庇い、怪我まで負わせてしまった。

「・・・なぜ・・・それはこちらのセリフです！ あなたの方が明らかに大変でしょう！」

「なあにこれしき、くつ」

シロウは強がつてゐるが足元が完全にふらついている。

(私の剣はー？)

再びバーサーカーと向き合つたために、さつきはじかれてしまつた剣を取ろうと思ったが、それは無理だつた。そんなセイバーの様子に気づいたのかシロウは投影を開始し、セイバーの剣「勝利すべき黄

「金の剣」^{カリバーン}を作り出した。

「「「なつー?」」「」

周囲の誰もが驚いていた。セイバーまでも驚きを隠せずにいた。

「おれはお前の剣を知っている問題ないだろ?」

意識も朦朧としている状態のはずなのに投影まで行つてくれた。笑みを浮かべているがそんな余裕はないはずだ。本当に申し訳なくセイバーは感じた。

「あんな剣がなんだつていうの?バーサーカー!」

イリヤがバーサーカーに命令し、怪物は一矢うに突進を開始した。

(もう少し言つてこる場合ではない!—!—)

セイバーは魔力を剣に込め、言い放つた。

「約束された勝利の剣!!!!!!」

セイバーの剣から究極の光の斬撃が放たれ、迫り来るバーサーカーを切り裂いた。

砂煙でどうなつているかわからないが次第に晴れてきて怪物が動かすにたつているのがかくにんできた。

「どうしたのバーサーカーやつちやいなさい!..」

イリヤがそう命じるがバーサーカーは動かない、一回死んだのだと、誇り高い戦士は決して約束を破らなかつた。

「という訳だ、じゃあなたお嬢ちゃん。」

戦いが終わり四人は衛宮家へとすばやく撤退していった。

「まあいいわ、一度とはいえバーサーカーを死なせたんだもの、今回は許してあげる。」

イリヤもバーサーカーを連れ、城へと帰つていつた。

「アーチャーか、面白いサーヴァントだったわ。ふふつ

「はあつ、はあつ。」

「ちょっとアーチャー大丈夫！？」

「気にするな凜。」

正直もう倒れそだつた、だが心配かけまいと精神力でごまかしていた。

四人が衛宮家につき安堵の息をしたところで、気を抜いてしまつたシロウに猛烈なめまいが起こつた。

(バニ・カーニー・ゲイ)

バタツ！

シロウは足の力が抜け床に倒れこんでしまった。

F - ? . F F F

三人は何が起こったのか理解できなかつた。しかし

「シロウツー、シロウツー」

(ダメだ、眠くなつてきやがつた。くそつ。)

セイバーの叫びに近い言葉で一人は我に返つた。シロウは返事をしない。そして我に返つた遠坂は、

「ちゅうとアーチャー！しつかりしなさい。アーチャー！」

遠坂はすぐに宝石を使つた治療を始めた。セイバーは血が通つていいのか疑つくらい青い顔をしてアーチャーの手を握り、震えていた。

やつと会えたのになぜ?、手に温かさが伝わってこない、セイバーは生きた心地がしなかつた。

「大丈夫よセイバー、休めばもつ元に戻るわ。奥に運びましょう。」

「わたしがやります！」

セイバーは叫んでいた。凛もさつきからおどおどしているヒミヤも驚いていたが、やがて凛が、

「それじゃあ頼むわ、もしなんだつたらそばについてあげなさい。」

「ありがとうござります。」

セイバーはアーチャーを寝室まで運び、寝ているシロウの横に正座し見守っていた。

(わたしのせいだ、あそこで氣を抜かなければ!)

涙がこぼれてきた、セイバーはシロウの胸に顔を押し付けしばらくの間そこで泣き続けた。

大きな壁（後書き）

読んでくれた方ありがとうございました。このペースで書いていけないと思いますが。
どうぞよろしくおねがいします。

へんな内容になつてきているかも知れませんがよろしくお願ひします。

衛富士郎にも投影はおこなわせるつもりなので・・・
今回はこんな形で違和感あると思いますがおねがいします。

現在と過去（前書き）

いやあ、早くもペースが崩れましたね。

なかなかいい案が浮かばなくて、お気に入りにされている方々には本当に申し訳ないです。今後もがんばるのでよろしくお願ひします。今回は戦闘も何もないです。展開が少なくつまらないと思います。

すいません。

しかも短いし・・・

すいません徐々に長く出来るようにしてこようと思つたのがいります。

現在と過去

(「……は？」だ・・・。俺は確かにバーサーカーに負わされた傷で・・・、もといた世界か？、いや違う）

シロウはとても懐かしいところで目を覚ました。それは自分が昔ずっと住んでいた家の一室、アーチャーはバーサーカーとの戦いの後から2・3日程眠っていた。だが本人はどれだけ眠っていたかを知らない。

(「いかんどれだけ眠っていたのか、起きなければ、万が一敵が来たら・・・・・・・・・・ダメだ体が重い。」)

シロウは自分が起きるのは、まだバーサーカーとの戦闘のときに追ったダメージのせいだと勘違いしていた。だが重いのは胸の部分だけだということに気づく。

自分の胸のほうに手をむけてみると美しい金色の髪と自分の胸にしがみついて眠るセイバーの姿が確認できた。

さつきまで起きていたのだろうか、とても疲れたように寝ている。

(「どうしたものか・・・・・・・・」)

かいわい周りには、ほかにサーヴァントの気配はなかつたので、このままゆっくりしていることにした。

明け方セイバーは田を覚ました。

(昨日もシロウタリヤアツアツでいたのに途中で歸ってしまったんだ。
シロウタリヤアツアツ・・・・・。)

そう思つて顔を上げてみると、シロウタリヤアツアツを開け、こちらの姿を見ていた。

「なつ、な、な、な、な、ななな

「な」だけじゃわからん

やはつしつかうとおきてこひがひにも反応をしてくれてこる。

「やつと田を覚ましていただけたのですね。」

(やつと、俺はそんなここの状態だったのか。)

「セイバー、おれはいったい・・・・・。」

だがセイバーはいつのまにか涙を流し俺の胸に抱きついていた。

「いつたいどれだけあなたは私を心配させたと思っているのですか、あの時、私が攻撃をくらっていたらあなたは傷つかずにすんだではありませんか。私のほうが防御のランクが高いのに、自然治癒の能力が高いのに、私が受けていたほうが良かつたのに・・・なぜ・・・」

セイバーはシロウが着ていた服をとても強く握っていた。

（セイバーはずっと俺がかばつたことを気にしていたのか。）

シロウはセイバーが思っていたことを理解し口を開いた。

「お前はおぼえていないか、セイバー？」

えつ、といつよつと、顔をあげこぢらを見る。

「俺は前にお前がバーサーカーと戦っていたときも最後かばいに入つただろ？ たぶんそのときの気持ちと同じだつたんだ。誰かが傷つくのを見たくない、誰かが傷つくなら俺が変わりになる。正義の味方をめざしてからな。それにその相手がセイバーならなおさら傷つけたくなかつたしな。」

セイバーは最初のバーサーカーの戦いのときを思い出していた。

自分がバーサーカーと戦い、ボロボロになり魔力の供給ももらえず、にそれでもなお戦おうとしたとき、バーサーカーが岩の剣を使い止めを放つてきた・・・それを当時、主だったシロウがかばい大きな怪我を負った。

あのときからシロウは何も変わっていない、またはあのときのシロ

ウに戻ってしまった。と考えた。

しかしほりはそんな優しさを持つシロウに惚れたのだ、いまみ
たいに他人を優先してしまった優しさを持ったシロウが。

「た・・しかに・・・あのときも・・・そつ・・でしたか・・私
をかばうのはやめてくださいといったではありませんか！」

セイバーはどうじいいか分からなくなり、また泣き出しちまつ
た。

「そうか・・・すまなかつた。」

シロウは再び自分の胸で泣き出してしまったセイバーを優しくなで
続けた。

セイバーがまた泣き疲れて眠ってしまった後、ゆっくりとふすまが
開き、凛が入ってきた。

「どう調子は？」

「どうやら凛にも心配をかけてしまったらしい。本当に申し訳ない。

「ああ大丈夫だ。もう戦闘にも故障はないと思う。・・・すまん心

配をかけたな。」

「やつ、なら安心したわ、別にあんたがそんな謝る必要ないわよ。」

「おまえの宝石も治療に使ったのだら?」

「ええ、だけじ本当に氣にする」とはないわ、ストックはまだまだあるし。感謝するなら今そこの眼つてるセイバーに言いなさい、その子三日間ずっとあなたに付きつ切りだったわよ、あなたが家の前で急に倒れたときなんて顔を真つ青にして震えていたわ。」

「三日そんなに眠っていたのか・・・そつかそんなこともあったのだな。」

「まあいいわ、気にしないで、それよりも話しあいたいことがあるから、あとで居間に集まると思つからセイバーが起きたらいかう来て。」

「話しあいたいこと?」

「ええ今後のことよ

そういうて凛は立ち上がり、またふすまを閉めてエリザベスの方へと向かっていった。

現在と過去（後書き）

読んでくださった方ありがとうございました。
今回も誤字には気をつけたつもりです。

何か気になることがあつたら教えてください。
答えられるが分かりませんが・・・・。。。

次回もよろしくお願ひします。

回盟 決意（前書き）

やつと更新でもおもった。

今回も進度はあまり進んではござせんが。楽しんでもらえたならあと思っています。

それでは4話です。

同盟 決意

いま俺とセイバー、凛と衛宮の四人で居間に集まり話し合いを行っている。

「ねえ衛宮君、私たち同盟を組まない？」

「えっ！？」

凛はバーサーカーとの戦いの後、とても考えていた。

バーサーカーはとても強力だ。普通は戦闘力が低い英靈が狂暴化することでそれを補っているのだが、イリヤスフィールが連れているのは違う。ギリシャの英雄ヘラクレス。普通でも強力な力を持つているだろうが英靈がバーサーカーとなり更に白兵戦が強くなっている。しかも一度倒しただけでは死ない。

アーチャーとセイバーが協力してあの結果だった。

「衛宮君もこの前の戦いでイリヤつて子が連れている英靈が強力すぎるってことぐらい分かったでしょ。アーチャーとセイバーが協力してあの結果だったのよ。何それとも協力したくないっての？」

凛がエミヤに問い合わせた。

「いや違う、突然で驚いたんだ。」

「あんた・・・はあ。そんなことで一々驚いてると早死にするわよ。
それにこれは私たちの英靈のためでもあるのよ。」

「？？？？」

「なに不思議がってるのよ。あんただってこの二人が敵同士になることなんてあると思う?あなたたちもお互いに戦いたくないんでしょ。それに目的も同じようだし。ねえそうでしょ?」

シロウとセイバーは声には出さなかつたが、この凛の意見にはとても賛成であつた。そのため一人の表情には薄らと笑みが浮かんだ。

「ああ、そうだな。俺も遠坂が味方だと心強いし、アーチャーとセイバーが敵同士であつてはいて欲しくないしな。よろしく頼むよ。」

「それじゃあ決定ね。よろしく頼むわ。じゃあ放課後と帰宅後に情報交換をしましそう。あつたらでいいから分かつたことを教えて頂戴。」

「わかった。」

「それでは私たちは屋上でほかの敵の英靈が来ないか監視していく。何かあつたら意思疎通で教えてくれ凛。」

「わかったわ。それまでセイバーと愛でも育んでなさい。」

「「なつ！ー！」」

凛の思わぬ発言にアーチャーもセイバーも真っ赤になってしまった。

凛の目は明らかに何かを楽しむような目をしている。

そして二人同時に感じたのだ

(アカイアクマだ・・・)

と。

そして次の日。

学校が終わり、四人は屋上に集まっていた。

「アーチャーこの結界誰がはつたか分かる?」

「おそらくだがそれはライダーによるものだらう。」の様子だと発動まで後五日つてとか。これが発動するところなことが起きないだろ？』

「おじ遠坂何の話をしているんだ？」

昔の俺め……すつとぼけたことを

「ねえ衛宮君、あなたもしかしてこの学校に張り付けてる結界に気づいてない？」

「結界？あの門に入ったときの甘ったるい感じのやつか？」

「……あんたそれを不思議に思わなかつたわけ？」

「いやただの立ちくらみか何かだと済つて。」

「…………」「…………

アカイアクマと未来の俺（可能性のひとつだが）とセイバーがジト田でこちらを見ている。…………などである。

「まあわかったならいい。ビリする凜結界の核を潰していくか？」

「やうね、そうすれば発動を遅らせられるかもしれないし。でも位置の把握が出来ないわ。」

「それならヒミヤを使えばいいと思こます。ヒミヤはのよくなことに關しては敏感ですから。」

「えつ？」

本人の衛宮君も驚いているじゃない・・本当なの？

「セイバーそれはなぜ分かるの？」

「昔の体験からですよ。」

セイバーはそう言い。アーチャーを見た。彼は懐かしむような表情をし、笑っている。

「なるほど。」

「それじゃあ、行きましょう。衛宮君。」

「お、おつ

そつじて二人は校舎の中に入つていった。

「これからもずっとあの俺を凛が支えてくれ、導いてくれれば、あの俺はこうならないと思つただがな」

シロウがぼそりとほくへすこし悲しげな表情をしていた。

「いいえ」

そつとセイバーが両手でシロウの手を覆つた。

「こまからでも遅くはありません。今回の聖杯は異常ないよつです

し、それにいまのあなたには私がついています。私を変えてくれたあなたのように私はあなたと良い道を進めるように導きます。ですからそんなに悲しい顔を見せないでください。」

このセイバーの言葉は今のシロウにとってこれ以上ない慰めだった。

そしてシロウは誓った。セイバーと共に戦い、自分の間違った道を正すことを・・・。

同盟 決意（後書き）

読んでくださった方ありがとうございました。

だんだん話を考えるのが難しくなつてきました。
出来る限りがんばろうと思ひますが・・・。

何かアドバイスやリクエストがあつたらどうぞ！ 答えられるかわ
かりませんが・・・

次回もよろしくお願ひします。

学校の結界（前書き）

やつと更新できました。
相変わらずの駄文ですがどうぞよろしくお願いします。

学校の結界

現在土郎と凜で結界の核を潰している。二人一人にはライダーのマスターが慎司であることは伝えた。

「ふう、こんなもんかしら。あの『』、私がいると知つていて喧嘩売つてるのね。」

「本当に慎司が・・・ああこれくらいでいいだりう。」

二人はもう潰しきつてしまつたのだろうと思つてゐるがシロウは違つた。見落としている場所がある。

「まだだ」

「「え?」」

「貴様は普通は一番疑つても言い場所だぞ。そんなところも見当がつかないのか。」

「そんなこといわれてもあれだけ潰したんだ。大丈夫だろ?」

「はあ・・・まあいいお前はあいつが魔法陣を書くとしたらまあどこに書くと思つんだ。一番かけそうな場所はどうだ。」

「えつ?うへへへへん・・・・・・・あつーそつか」「道場まだ見てない。」

「そこにほんとあるの?」

「凛君は未来から来た私を信じないのかね。」

「べ、別に疑つてなんかいないわよー。ほら早く行くわよ。」

（「道場へ）

「…………」

士郎と凛は前にある陣を見て啞然としていた、ここにあるものは見えなくなつてゐるわけでもなく、とても強力なものであると分かる。

「こんななのを見落としていたのね。」

「ああ良かつた。」

一人は早速それを潰しにかかった。そのとき

「あやああああああー！」

女性の悲鳴が上がった、

「今のはーおい遠坂！」

「分かってるわよ…………よし、終わったわ。」

四人は急いで悲鳴が上がった場所に向かった。

「ライダーでしうか

セイバーがシロウに聞く。

「ああおやりくな、凛、君の出番になるぞ。治療でな

「ええそつみたいね。生氣がないわ」

「氣を失ってるだけじゃないのか？」

「違ひんだよ、馬鹿」

「ああ氣が散るぞ」のドア閉めてー！」

「あつああ」

(までよライダーはここからになくなつたのか?)

そう思つた瞬間銀色に光るものが遠坂の頭に向けられ飛んできた。

「遠坂危ないー！」

ガキンッ！

すばやく反応したシロウが干将・莫耶で叩き落した。

「むやみに人をかばうな馬鹿。だからおまえは足を引っ張るんだ。」

「なんでだよ普通助けるだろ。」

「ヒミヤ、私もシロウと同じ考え方です。あなたがもし死ねば私は消えてしまつですよ。」

「貴様のせいでセイバーが消えるんだ全部を守るといつて貴様が死んでもセイバーにまで被害が出る、それに今貴様が抱いている正義の味方はあきらめたほうがいい。その先には後悔と死しか残らん。」

「なつー！」

「凛、俺たちは馬鹿なマスターの英靈を相手していく

「ええそつして」

「「「くれぐれも貴様（ヒミヤ）は来るな（来ないでください）」

「

ふたりがぴったりとハモリ、物凄い量の殺氣を送られヒミヤは動くことが出来なかつた。

「さて、いるんだから出でてきたらどうなんだライダー？」

「そうです隠れていないで出てきなさい。」

「なんだなんだ衛宮が来ると思ったら英霊が来たか」

慎司が木の影から余裕の笑みを浮かべてでてきた。

「なんだ最弱のマスターとその英霊か」

シロウが挑発をする。

「な、なんだと！僕があの衛宮より遅れているというのか。」

「そもそも君には魔力がない。魔術なんて使えないのだ
うづ。」

「ふざけるな！僕は間桐の後継者だぞ！くそつやれライダー！」

自分が不利だとわかつていかない慎司の火蓋が切られたことでライダーとの戦いが始まった・・・

学校の結界（後書き）

読んでくださった方ありがとうございました。
なるべく早く仕上げるように善処するのでまたよろしくお願いします。

✓ sライター（前書き）

久々の投稿です。

相変わらずの駄文そして短文ですがよろしくお願いします。

✓ sライダー

「はあ！」

「くつ」

現在セイバー・アーチャー→sライダーとなつてゐるが明らかにライダーが劣勢だった。

「こんなマスターだと本来の力も出せなかろう。哀れだな。」

「おい！ライダー何やつてるんだ！早く一人とも殺しちまえよ…」
だがシロウとセイバーに勝てるはずもなく、ライダーは防戦一方だつた。

「セイバー、ライダーの相手を頼む。」

「わかりました。」

アーチャーはそつこつと慎司のまつこ向け、駆け出した。

「ひいっ、ライダー！こいつを何とかしろ！僕を助けろ！」

慎司は恐怖でそう叫んだが、ライダーはセイバーが身動きが取れないようにつかれているためどうすることもできなかつた。そしてアーチャーは慎司の前まで行くと、こぶしを握り思い切り殴りつけた。

「があ！」

当然、英靈に殴られた慎司は吹っ飛び、木に叩きつけられた。
そしてシロウは慎司の持っていた「偽臣の書」を取った。

「なつーかつかえせー！」

「ライダーに命ずる、今すぐ真の主の元に戻れ、そしてその主が一度とこのような兄に近づかれないように守ってやれ。この書は私が処分しよう。」

「……わかりました。」

「ライダー何やってるんだーおいー！」

ライダーはシロウに言われたとおりに従い去つていった。そして必要のなくなった偽臣の書は音を立てて燃えた。

「あああつー！」

慎司が叫びをあげている。セイバーがこじらひて来て、シロウの隣に並んだ。

「死にたくなかつたら誓え、もつこの戦争には関わらないと、誓わないのならこの場で殺す！」

「凜や衛宮にも今後危害を加えないと約束してください。」

殺氣をだしシロウとセイバーは慎司を脅した。

「ひーーっわっわ、わかった」

「なら、もうあと逃げる。」

そうこうと慎向はあわてて踵を返し逃げていった。

「ふうやけに凜たちのところに戻るかセイバー？」

「ええやつしましょ。」

一人はなぜか寄り添つようにして歩きながらマスターのところへと戻つていった。

「凜じゅだそのいの調子は？」

「ええもつ心配ないわ、それであんたたちの事を聞かせてもらひなつ
かしら。」

「わかつた。」

「わかりました。」

そしてシロウとセイバーは自分たちがライダーと戦ったこと、慎司を殴ったこと、ライダーを元の主のところへ戻したこと、慎司を脅したこと、すべてを話した。

「だからもう二つの結界についても心配はいらんだろ？。」

「そうか良かつた。」

衛宮が満足したよつた笑みを浮かべている。

「フフッ」

セイバーがその様子とシロウを見て笑う。

「どうしたセイバー？」

シロウがセイバーにたずねたが、セイバーはなんでもないといつようにて手を振り言つた。

「シロウの優しさが変わつてないことが分かつてうれしいのです」

「はいはいそこまで、じゃあ今日の結果をまとめるために衛宮君の家に行きましょ」

「「ああ」「はい」

▼ sライター（後書き）

読んでくださった方ありがとうございました。

次はいつになるか分かりませんがよろしくお願いします。

衛門家にて（前書き）

めつね短いです。

次はキャスターか、キャスターはただあいつと廻らしてみたいだけなんだろうがな。

「セイバー君は今後どうおもつておられる?」

「土郎と一緒に居ます。」

速攻で返事が返ってきた。

「や、そうか。」

俺はしばらく考えた。

「土郎、何を考えているんですか?」

「ああキャスターについてだ。あとイリヤについて。」

「そうですか、キャスターに関しては衛面を覗張つておけば問題ないのです?」

「まあそりゃうな、あの馬鹿が操られていくのを防げば良いかもしけんが、・・・」

「キャスターが動きを見せるかもしえないと・・・」

「やうだ。」

キャスターはやうひと思えば手を組めるだらう、

「凛に相談してみるか。」

「そうですね。」

「凛、君は今後どう動いていくの？」

「そうね、ライダーの心配はもういいのよね。なら次はキャスター
かしい。」

「そうか動くなれば、早いほうがいいと思ひやが。」

「そう。わかったわ、今夜動いて見ましょ。」

「了解だ。」

「ああセイバーもつてゐるよ」

「衛宮、あなたはもつと警戒して動いてください。それと土郎から教えてもらつた鍛錬はしっかりとやつていますか？」

「そうか」

「キャスターに操られていたんだ馬鹿者。」

「はつ！ア、アーチャー、おれはなぜ。」

少し殺氣をいれて声を発した。

「何をしているんだ小僧？」

衛宮が起きて一人で寺に向かおうとしている。

「まいせー、それまで。じゃあ行くわよ」

そうして4人はアサシンとキャラスターが居る寺へと向かった。

短くてすいません。

ネタが浮かびません。

アドバイスください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0223o/>

Fate～再開～

2010年11月27日15時21分発行